

五十年入学 稲 賀 繁 美

冬合宿も無事すんだことかと思えます。当方もかわりなく、ラジオはたいへんな寒波と言ってますが、Tokyo. ほんと寒くはないような気がします。もつとも数日前の雪がまだ残っています。

日課は、というと、九・〇〇ぐらいには起きて、午前中は朝のおつとめ。午後は午後のおつとめ、夜は夜のおつとめ……何のこっちゃ？ とにかく一リットル二〇〇円ほどのワインばかりのんで、（何かの）うつぶんを払うじゃないはらしています（漢字をとんと忘れてしまった）。

先日（ゼミ）で、なぜか一番手に一・三〇ほどの発表をやり、これでもはや、これといつて責務もなく、あとは気楽にすごせば良いハズなのですが。原稿からはようやく解放された代りに、タイプうちになぜか追われる毎日であります。

先日は、日本館という、わがすみかで、うちのディスコのまねごとをやったら、ヤロウどもの中では、小生のおどり方がふし

ぎなことには一番ましだったとか。要するにそれ位、体のうごかない、ご老人の運動音痴のガリガリモージャのおじさんたちばかり住んでいる、ユーレーヤシキが我が住み家なのです。それにしてもこれしきのことで次の日は足が痛くなつたのだから——スクワットジャンプは毎日やっているにもかかわらず——もうそろそろ小生も本当に年貢の収め時のようです。もつともこういう場合、うしろわざ式のことをやるとたいへん良く効くことがわかりました。諸氏もおためしあれ。相手の男の子か女の子かしらないけど、ころつとひっくり返るから。（男の子ならはつたらかして、女の子なら、だきとめてあげればよろしい。）

先日は、（同じ書き出しばかりで失敬）『赤門』の理事になって住所のない坂口登氏のところに参上。自然食屋の名にたがわずホーチョーで花形に切つてもくずれない豆腐に、まつ黒のコンニャクに、てんぷらにはちゃんと、大根おろしが付き、新鮮な刺身まであり、主食は五分づき米、おすましは、タラの汁というたいへんガチソウでありました。男の子ばかり七つぐらいのを頭に三人いて、（その上にお嬢さんがいるのは、これはおてつだいさなか？）まだまだチビばかりで大変な様子です。

大学のことは書いてもわかんないでしょうからはおきますが、何やらオバサンばかりです（既婚という意味のみにはあらずして、オバアチャンばかりなのだ）。

本年いっぱい本での再販制度がなくなるとかで、少々買いこみ

ましたが、一番の大手の本屋がこの廃案に反対しはじめて、わけがわからなくなりました。いずれにせよ、二人部屋を一人であてがわれたので、だだっ広く（しかし、ここに二人おしこまれたら確実に気がくるう）、とても淵氏が想像したような本に囲まれた屋根裏式の感じにはなりません。すぐ近くに公園はあるし、運動場はあるし、食堂はあるし（毎食五フランちょっとだから日本で言う二五〇円くらいでしょう）でかえつてめぐまれますぎている、一種の人間動物園に *segregate* されてる感じで、やっぱり国際大学都市なんてものは良し悪しだなと感じつつも、パリ市内の住宅費のきちがいじみた高さ（六畳で八万円以下はまずみつからぬ）、をオモンパカッて、がまんしている昨今です。まずは近況報告まで

（赤門に転載可）

◎この原稿は、合気道部宛の書簡を著者の諒承を得て掲載したものです。